南の国のナデシコ税理士

成功へのキセキ

第24回 本当にあった不思議なお話～星つむぎの歌

最近、本業の合間に時間をつくって活動するだけのはずだった、戸沢財団の仕事が増えてきました。

戸沢財団では、ゼロベース未満のコドモを対象に支援をしています。財団の活動を通じて、社会のセーフティネットの網からこぼれ落ちるコドモたちが、たくさんいることを知ったからです。

たとえば
短い一生を病院で暮らすコドモたち。
学校に行きたくても病室を出られないコドモたち。
誰よりも信頼できるはずの親から殴られるコドモたち。
生きるための最低限の食事さえ与えられないコドモたち。

病気のコドモたちに対しては、「心魂プロジェクト」というNPO法人を通じて、支援をしています。

心魂プロジェクトは、元劇団四季のメンバーが中心となって、立ち上げたNPO法人です。元もと劇団四季には、障がい者用のシートが用意されていて、その時も、ある自閉症の人が、招待されたのだそうです。その人は心魂の総合プロデューサーである寺田さんの舞台に感激し、もう一度お芝居を観たいとの一心から、一人で外出する練習を始めました。

一人で家のドアを開ける練習。一人で駅まで歩く練習。一人で切符を買う練習。一人で電車に乗る練習。一駅から二駅と距離を伸ばす練習。

そして、一人で四季の劇場にたどり着き、一人でチケットを買って、芝居を観るまでに、1年という月日がかかりました。いわゆる健常者である私たちには、なんでもないことが、その人にとっては、大変な努力を要する成功体験だったのです。

そのとき寺田さんは、世の中には劇場に来たくても来られない人がたくさんいることを知ったそうです。そして、そういう人の所に、自分から出かけて行ってミュージカルを届けることが、自分の使命だと感じたのだそうです。

劇団四季の舞台に立てるなんて、芝居を目ざす人の中でも、ほんの一握りの人にしかできないことでしょう。そこに到達するまで、私たちの想像を絶する努力をつんだはずです。それでも寺田さんは、おそらくはご自分の夢だった四季を退団し、同時に生活の糧もすべて失って、全国の病院に本物のミュージカルを届けるという「デリバリー・パフォーマンス」を始めたのです。

これは、生半可な気持ちでできることではありません。ほんの偶然で、心魂プロジェクトの活動を知った私は、わずかながら、彼らの活動資金を支援しています。

一方、児童養護施設のコドモたちに対しては、直接、コドモたちと交流しながら、支援を行っています。施設に引き取られたコドモは高校を卒業した途端、国からの保護は、まったくなくなります。そのため高校を卒業すると、一人で暮らすための生活費を稼ぐために就職をしなければなりません。

それでも大学に進学したい、専門学校に行きたいと希望するコドモはいます。けれど彼らに学費を払ってくれる親はいません。それどころか、アパート代や生活費の負担など、金銭的な問題が、たちまち重くのしかかってきます。

そんな彼らが、お金のために夢をあきらめなくてもいいように、進学を希望するコドモの学費や生活費をサポートするのが、財団の主な活動です。

単にお金を送るだけでなくLINEでもつながって、彼らが困ったときは、すぐに助けられる体制もとっています。幼いころ、命を守るための愛情を注いでもらえなかったコドモは、つらいことがあったとき、我慢する力、ふんばる力があまり強くはありません。

私が目ざしているのは、近くに住んでいるわけではないけれど、ちょっと困ったとき、「あ、そういえば！」と思い出してもらえる親戚のおばさんです。

けれど、何かあったときに連絡してもらえる存在になるのは、容易なことではないということも、分かってきました。目には見えない深い心の傷に、どうやって関わっていけばよいのか、途方にくれることもあります。

以前にこのコラムでもご紹介しましたが、児童養護施設のコドモたちともっと交流したいと、八ヶ岳自然教室を開催しています。施設によって、指導員によって、もちろん参加するコドモたちによって、反応は様々です。

良かれと思って、食事をつくり、ハイキングに行っても、喜んでもらえるとは限りません。「メンドくせーな」など、親だったら当然、注意するような言葉を吐き捨てるコドモもいます。

こっちはこんなに、やっているのだから、感謝して当然…などという甘い気持ちは、あっという間に吹き飛んでしまいます。見返りなど、期待してはいけない。ただひたすら、愛するしかないのです。

そう、見返りなど求めてはいけない。これは養護施設のコドモたちと関わるとき、心していることです。ここから先は、信じてもらえる人だけ、読んでくださいね。

先日も、ある児童養護施設のコドモたちを連れて、八ヶ岳に行ったときのことです。何とかコドモたちの心を開きたいと、私は「素話（すばなし）」をしました。素話とは、読み手がお話を暗記して、自分の言葉でコドモに話して聞かせること。絵本の読み聞かせと違って、聞き手は自分の頭の中で、情景を想像しながら、聞きます。だから、聞く人によって、聞く精神状態によって、お話のイメージは、まったく異なったものになるのです。

これはシュタイナー教育で使われるメソッドで、私は自分のコドモに毎日、毎日同じ話を聞かせていました。コドモは分かっていても、同じ場所でドキドキしたり、喜んだりしてくれたものです。自分のコドモと同じように、彼らにも愛情を伝えたい、私はそんな風に思っていました。

選んだ題材は、『星つむぎの歌』。

ある星のきれいな村に、優しい音楽を流すオルゴール使いの男が住んでいました。男の鳴らす大きなオルゴールの中に入ると、どんな病気も治ります。ところがある日、男の子がオルゴールの中で死んでしまうのです。父親は怒り狂いますが、男はどうすることもできません。その後も、オルゴールの中で死んでしまう人がたくさん現れ、男は悲しみのあまり、病気になってしまいました。男は自分もオルゴールの中に入り、やがて音楽は止まってしまいます。男に病気を治してもらった人々がやってきて、オルゴールを鳴らそうとしますが、ネジはびくともしません。男の子を亡くした父親もやってきて、オルゴールの歌を歌いますが、それでもネジは動きません。やがて、真っ暗になった夜空の一番星から、一粒の光のしずくが落ちてきます。光のしずくは、あの優しい歌を歌いながら、オルゴールの中にポトリと落ちました。それは、あの少年のボーイソプラノです。そしてそれを合図に、たくさんの星のしずくが、亡くなった人の声であの歌を歌いながら、オルゴール目指して、あとから、あとから落ちてきます。あたりは、まぶしい光と音楽に包まれ、ついに男は目を覚ます…。

素話が終わって、その夜のことです。

じつはその頃、すごく嫌なことがあって、そのことを考えると悔しくて、私はほとんど眠ることができませんでした。それでも、翌日のハイキングのために体力をつけておかなければと、目をつぶって、なんとか寝ようと努力をしていました。

ところが寝ようとすればするほど、まぶたの裏に金色の花びらや無数の蝶々が舞い始めて、眠るどころではありません。輝くばかりの蝶々や花びらの数は、どんどん、どんどん増えて、あまりの眩しさに私は思わず、目をあけてしまいました。

すると、目の前には信じられない光景が広がっていたのです。天井から、窓から、カーテンから無数の光の帯が、舞い降りてきて、山荘の部屋は、まばゆいばかりに光り輝いていました。それは、この世のものとは思えない美しい光景でした…。

私は心から癒され、ゆっくり眼を閉じると、優しい眠りにつくことができたのです。

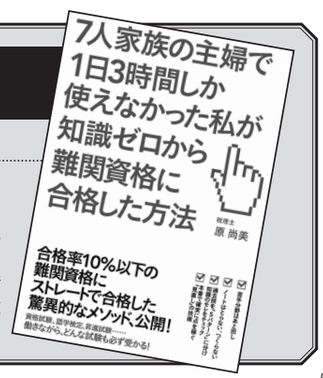
2016年夏。これは本当にあった出来事です。

◆筆者 原 尚美（はら なおみ）プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練（現：全国公開模試）「財務諸表論」「法人税法」を全国1位の成績で、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性だけのスタッフ30名、一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』（いずれもソーテック社）、『51の質問に答えるだけですぐできる「事業計画書」のつくり方（日本実業出版社）』『トコトンわかる株式会社のつくり方（新星出版社）』『世界一ラクにできる確定申告（技術評論社）』『一生食っていくための士業の営業術（中経出版）』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

好評発売中

7人家族の主婦で1日3時間しか使えなかった私が知識ゼロから難関資格に合格した方法

原 尚美 著（中経出版）　1,300円+税

アタマのいい人と勉強のできる人は違います。
勉強のできる人は、点をとるコツを知っているだけなのです。
どうすれば本番で実力以上の力を発揮して、難関試験に合格するための、超合理的な、大人の勉強法について書いたものです。
がんばっているのだけれど、なぜか結果のでない方、勉強したいのに、仕事が忙しくて時間がとれないビジネスパーソン、今よりひとつ上の人生を目指したくて、悩んでいる方、このまま家庭の中だけに埋もれてしまいたくない子育て中のママ、そんな皆さんへの応援の気持ちを込めた一冊です。